（第3種郵便物認可）

欧州からの風

TAO海外公演通信

音楽の聖地で経験重ね

1月4日。正月気分もそこそこに、新たな編成チームがヨーロッパツアーへと出発した。主にドイツ、スイス、オーストリア、スペインの4カ国・55都市で3カ月間にわたり、62公演を行う。

ヨーロッパといえばEU。広大な土地にある何十もの国をまるで国境がないような感覚で人が行き交う、一つの大国のようでありながら、その中にさまざまな人種や言語が存在しているという日本と全く違う点で大変興味がある。

TAOがヨーロッパツアーを始めたのは2006年。クラシック音楽の探求から始まった。作曲家の生涯をモチーフにした映画を見たり、カラヤンの音楽を聞きながら彼がどんな演奏者だったのか思いを巡らせたり、ツアーの合間ではありとあらゆるところに足を運んだ。

タオ・エンターテイメント社長の藤高郁夫氏

ベートーベン、バッハやブラームス、ショパン、モーツアルトなどたくさんの作曲家の教会を訪ね、あらゆる美術館、博物館を巡った。そうするうちに、なぜクラシックが世界中から愛し続けられているのか、その理由を肌で感じることができた。そしてそれは、TAOの音楽制作に大きな影響を与えることとなった。

まず、クラシックというのはその時代の最先端の音楽であったということ。その作曲家や演奏者はスターであり、伝統的で古くさいイメージが一切崩れてしまった。日本に置き換えると、和太鼓という伝統楽器を難しく重たく継承するのではなく、若者がカッコよく自由に演奏するのが一番！と改めて思わせてくれた。

今回のヨーロッパツアーのメンバー。新たな経験を積んでいく＝1月5日、ヨーロッパツアー最初の公演地、ドイツ・ゲルストホーフェンにて

また、作曲のヒントを得ることができた。音楽とは風景や物語を表現するのではなく、風景や物語、愛する人を思う〝感情〟を表現するものだと気付いた。自分にどんな感情があるか、それを第一に考え作曲すると、きれいな旋律になっていく。

クラシック生誕の地ヨーロッパの地を踏んで10年。一つの節目として、アメリカ、シンガポールに続き、ヨーロッパでもファンクラブを創設した。今回、各公演地で募集を始めている。ヨーロッパはTAOの世界展開の中でも大きな割合を占める。構想している世界ファンクラブ1万人20都市計画のうち半数を占めるだろう。いずれパリやローマなどでロングランを考えており、10年間一緒にやってきたプロモーターもその意向に理解を示してくれている。

また、今回渡航したメンバーの中にはヨーロッパを初めて経験する者もおり、編成についても、これまで分かれていた2班をミックスしていてとても新鮮な感じがする。音楽の聖地で経験を重ね、マルチプレーヤーが次々生まれてくれればと思う。

全62公演。収穫の多いツアーとなりそうだ。

（藤高郁夫）

◇　◇

竹田市を拠点に、世界的に活躍する和太鼓パフォーマンス集団「DRUM TAO」が、欧州公演を皮切りに2017年の活動を始めた。さらなる高みに挑むメンバーたちが現地からそれぞれの思いを報告する。

＝随時掲載